

ともだち

高山教区

四衢亮

今から2500年前のインドのこ
とです。アジャセとダイバ、ジーバ
カという三人トリオはいつも一緒で
した。アジャセは国の王子です。心
やさしいアジャセは、みんなの人気
者でした。おばあさんが重い荷物を
持って困っていたら、荷物を持っ
て座り込んでいれば、おぶって家に
連れて行きました。国中の人が王子
に期待していました。

ダイバは、アジャセに「さすが王
子様、すばらしい。」とほめ、はやし
たてアジャセの気を引きます。一
方ジーバカはというと、いつもニコ
ニコしながら黙々とアジャセの手伝
いをするのでした。

ある日、ダイバが「たいへんです。
たいへんです。」と走り込んでしま
した。どうしたと尋ねるアジャセに、
ダイバが言うには、「実は街で聞いて
きたのですが、あなたのお父さんで
ある国王とお母さんである后が、あ
なたが生まれる時にあなたを殺そう
としたのです。」「なんだと。」「
あなたが生まれる前に、国王が占師
を呼んで、あなたの将来を占わせた

ら、あなたが王を殺すだろうとい
うのでした。それを怖れた王
と后は、あなたを殺そうとしたとい
うのです。それを街の者は皆知って
いるのです。」「

「なんとということだ。父と母が私を
殺そうとした。その上国中のものが
知っていて、私だけが知らないとは。
皆うわべではおだてながら、心の中
では親を殺すような奴だと思ってい
たのか。」アジャセは、独りぼっちな
自分が、皆の疑いの目で囲まれてい
るのを感じました。その中に父であ
る国王や母もいるのです。そしてと
うとうと、ダイバの誘いに乗って家来
に命じて、父の国王を牢に閉じ込め、
その父を助けようとした母親も城に
閉じ込めてしまいました。

やがて牢の中で、父の国王が亡く
なりました。その知らせに牢に駆け
つけたアジャセは、父の亡くなった
姿を見た途端、後悔し始めました。
ダイバの誘いに乗り、怒りにまかせ
て行ったのですが、本当は父を愛し
ていたのです。今まで自分を大切に
育ててくれた両親との思い出が一挙
にアジャセに蘇りました。

子どもたちと聞く法話

その日から、アジャセは重い病氣
になりました。後悔の心が熱を呼び、
体中から膿みが出てきます。その腐
ったような臭いに誰も近づけないほ
どです。そのアジャセの様子に、ダ
イバはチツと舌打ちをしてどこかへ
行ってしまいました。そばで懸命に
看病したのは、閉じ込められていた
お母さんとジーバカです。

熱にうなされてアジャセは、「ああ、
私はたいへんなことをしてしまっ
た。もう生きてはいられない。このまま
地獄に落ちてしまつのか。恐ろしい。
もういやだ。」と叫ぶが早い、短剣
を手に握り自分の胸に突き立てよう
としました。

「何をされるのです。」というが早い、
その短剣の刃をジーバカがぐっと挿
みました。ジーバカの掌が切れて、
血が流れました。

「ジーバカ何を。」と叫んでア
ジャセははっと我にかえりました。
「アジャセ様、あなたが地獄に落ちる
なら私も一緒に落ちましょう。あな
たの心が傷んでいるように、私の掌
からも血が出ました。いいですかア
ジャセ様、今度のことで苦しみ悲し
いのはあなただけではいいのです。
ご自分もあなたに殺されそうになり
ながら、今必死にあなたを看病なさ
っているお母さんのことを考えない
のですか。国の人々もそうです。占

いなどに惑わされてほしくないから、
あなたをアジャセー敵を生まない人
と呼んで、愛してきたのですよ。こ
んなことをしたら、さらに多くの人
が傷つくでしょう。それに国の行く
末はどうなるのですか。今のあなた
は自分勝手です。」「ああ、ジーバカ。
私は本当に愚かだった。いつも私の
そばにいてほしい。」「もちろんです。
私は以前のやさしいあなたにもどっ
てくだされば嬉しいのです。」「



むすび

親友とは何でしょうか。仲良く遊
び、おもしろおかしく楽しみを分か
ち合うだけが親友ではありません。
苦しみや悲しみを共にし、最後まで
支え合えるのが親友なのでしょ。う。
そうした出会いがあるから、苦しく
ても悲しくても人生はすばらしいの
ではないでしょうか。

(出典は『涅槃経』による)